

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「邪視」への防衛策
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 最終回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5096



バスにぼろ靴の写真もあるが、最後には私が登った思い出の山「ヒムルン・ヒマール（7126 m）」（1983年）。

変わるネパールと変わらぬネパール

——グローバル化した世界に暮らす——

最終回

今でこそそんなことはないが、小さいころ私は新しいものを身に着けるのが苦手だった。白いズック靴を買ってもらっても、親の見ていないところでわざと土をつけ少し汚してから登校した。思うに目立つのが厭だったのだろうが、この直感的な嫌悪は、ヒトの心の深いところにある、リスク回避の心性につながっている気がする。

他者の妬みや羨望のまなざしによって、災いや不幸がもたらされるという考えを、文化人類学では「邪視」信仰と呼ぶ。いいなーと思って見られる視線に、強い力が宿るという畏れだ。それは大なり小なり文化を超えて普遍的に見られ、護符といった邪視に対する防衛策が世界各地で発達してきた。有名なのはトルコの「ナザル・ボンジュウ（邪視・ビーズ玉）」であろう。目には目をということか、青いガラス玉に三重の円で目を描いたそれが、あちこちに吊るされている。

ネパールも例外ではない。ここでは世の中で一番かわいく、か弱い、赤ちゃんを邪視から守るため、わざわざ乳児の額にあざのような黒い色を塗る。「カーロ・ティカ（黒い・吉祥印）」と呼ばれるこの邪視よけは、煤を油で溶いたものを乳児の目の周りに塗るついでにつける。バスやトラック、リキシャーも、持ち主にとってわが子のように大切な財産だ。新車ともなれば、誰の妬みを買うや

もしれない。そこで、持ち主はバンパーやリキシャーの車軸にぼろぼろの靴やサンダルをぶらさげて、新車をみすぼらしく見せるのに腐心する。

口に入れる食物も邪視にかかりやすく、災いに直結しやすいとされる。だから、他人が食事をしているところをじろじろ見るのは礼儀に反する。逆に、酒席は別だが、日々の食事は会話をせずにそそくさと済ます。その起源は、「危険な」食事時間を短くする工夫にあったろう。もっとも、団欒しながら時間をかけて食事を楽しむことは、少し前の日本でも珍しかったように、多くの文化にとって新しい作法であった。古来ヒトは、邪視に限らず視線そのものに神秘的な力を感じとり、畏れてきた。人の目を見て話すという西欧起源の習慣は、もしかすると誠意どころか、視線に対する究極の、真つ向勝負の防衛策なのかもしれない。

さて、連載も最終回となった。旅行ガイドブックとは一味違う、ネパールの素顔を紹介してきたつもりだが、お楽しみいただけただろうか。いつの日か、皆さまがネパールを訪ねてくださることを願いつつ、「ナマステ！（さようなら）」。

「邪視」への防衛策

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／「[都市的なるもの]の現在」(東大出版会 2004年)、「嗜好品の文化人類学」(講談社 2004年)、「エスノ・サイエンス」(京大出版会 2002年)など。